

兵衛志殿女房御返事

建治三年十一月七日 五六歳

銅の御器ごき二つ給おわび畢おわんぬ。

釈迦そ仏三十の御年、仏になり始めてをはし候時、牧牛女もくごと申せし女人、乳の粥かいをにて仏にまいらせんとし候ひし程に、いれてまいらすべき器うつわなし。毘沙門天王等の四天王、四鉢はちを仏にまいらせたりし、其の鉢をうちかさねてかいをまいらせしに仏にはならせ給ふ。其の鉢、後には人も盛もらざりしかども、常に飯いいのみちしなり。後に馬鳴菩薩めみょうと申せし菩薩、伝へて金銭三貫報にほうじたりしなり。今御器二つを千里にをくり、釈迦仏にまいらせ給へば、かの福のごとくなるべし。委くわしくは申さず候。

十一月七日

日 蓮 花 押

兵衛志殿女房御返事